

第33回岐阜外科集談会

日時 昭和39年11月25日

場所 岐阜医大C講堂

1) 橋角部 melanosarkom の1例

岐阜医大第二外科

上田茂夫・伊藤隆夫

小脳橋角部軟脳膜に原発したと思われるきわめて稀な限局性melanosarkomを経験した。症例39才，主婦，入院時頭痛，嘔吐，眩暈感を訴え，他覚的に項強直，左上下肢不全麻痺，左病的反射陽性，右伝導系難聴，右へ向う特発性眼振，鬱血乳頭を認め，脳脊髄液圧200mm水柱であつた。沃度油脳室撮影にて右橋角部腫瘍と診断，後頭下開頭術を行うに同部に超鶏卵大，黒色充実性の腫瘍を認め，大槽，延髄表面，後頭蓋窩の蜘蛛膜と多数の黒色点状斑を認めた。腫瘍は全摘したが，組織学的には悪性黒色肉腫であつた。術後レ線深部照射を行ない，50日現在健康である。生来右耳殻に青黒色の色素母斑を認めているがそれ以外に黒色腫を思わせる部分はない。以上の症例を報告すると共に文献的考察を行ったが，本邦報告例（中枢神経原発性黒色腫の）は10数例にすぎない。

2) 炎症性中脳水道閉塞症例

岐医大二外科

斎藤 晃・上田茂夫

第1例：3ヵ月男児。生後3日目より熱発あり，髄膜炎として治療され，生後2ヵ月より頭囲の異常に大なる事に気附く。側脳室輪尿管吻合によつて全治退院。

第2例：13才男子。1年前より口渇，多飲，多尿あり，次第に羸瘦す。松果体石灰化あり。トルキルドセン手術無効。脳室心耳吻合術後出血傾向を来して死亡。

第3例：16才男子。4年前より視力低下。経過中に一度髄膜炎として治療されし事あり。松果体石灰化あり。トルキルドセン氏手術により軽快するも，猶髄液圧高し。

第4例：34才女子。10年前より頭痛，視力障害あり。トルキルドセン手術により軽快せるも，術後猶髄液圧高し。

トルキルドセン手術後も髄液圧高きは蜘蛛膜下腔にも閉塞性変化があるためであろう。よつて脳室心耳吻合が有効であると考える。

3) 悪性腫瘍の統計的観察

岐阜市民病院外科

島田 脩・安江幸江

加賀谷 穰

岐阜市民病院外科に於て昭和34年1月より39年9月迄の5年9ヵ月間に入院治療した悪性腫瘍患者267名（癌腫256名，肉腫11名）について統計的観察を行った。この間の入院患者総数は2,926名で悪性腫瘍患者はその9.1%にあたる。癌腫256名中胃癌は155名で60%を占め，乳癌36名，直腸癌22名となる。年令的には50才代72名，60才代71名，40才代52名，70才27名，30才代24名で10才代1名，20才代8名の癌患者を見た。性別は男155名，女121名と男性が多い。胃癌患者155名中10名は手術不能で他の全胃癌手術患者に対し胃切除率は65.5%であつた。手術成績は1ヵ月以内死亡10例で死亡率6.9%切除例で4.2%である。根治的手術を行った患者及び全手術例の5年以上生存率はそれぞれ12.5%及び4.8%で乳癌の5年以上生存率は75%である。肉腫患者は男6名，女5名で4年以上再発を見ない1例を除いて他は2年以内で死亡した。

4) 広範な癒痕による胆道閉塞の一治験例

岐大第二外科教室

村瀬佳辰・三尾六歳

名和 正

胆嚢剝出術及び胃切除術後発生せる胆管周囲膿瘍による広範な癒痕の為，胆管炎，閉塞性黄疸を起した患者に，経十二指腸外胆汁瘻を設置し，その内癒化による胆道再建に成功し全治せしめ得たので報告する。

膿瘍は瘻孔によつて肝管，肝内胆管へ通じ総胆管はその末梢にて閉塞し，肝外胆道系は殆どが肉芽組織内に埋没されていた。Vater氏乳頭より挿入せるゾンデにて閉塞部を穿破してこれを前記膿瘍腔へ出し再び瘻孔より上部総胆管へ挿入して総胆管を連絡開通せしめ

得た。この走行に沿い9号 Nelaton 氏 catheter を經十二指腸性に乳頭部より挿入した。側孔により腸管への胆汁排出を計り十二指腸を腹壁に固定した後、腹腔外へ導いた。約2ヵ月後これを抜去した。Nelaton 抜去後2ヵ月半の現在経過観察中であるが異常を認めない。

5) 外傷性仮性大腿動脈瘤の治験例

蜂須賀喜多男・浅野多一
寺本勲男・松永吉和
森 直和・加藤量平

支那の野戦で手留弾破片が右大腿部から入る。約21年後、右大腿部搏動性腫瘍のため来院。動脈撮影の結果、動静脈瘻を伴える外傷性仮性動脈瘤の診断にて手術施行。動脈瘤と大腿動脈の一部を切除し、その血管欠損部に大腿静脈を移植した。術後23日目の動脈撮影では吻合部の狭窄なく循環は極めて良好であった。

6) 乳児にみられた腎水腫を伴った馬蹄形腎の一例

岐阜医大第一外科
種 田 耕 三

症例は生後5ヵ月女子で、生後2ヵ月頃より右下腹部に腫瘍を認め尿所見血液所見では特記すべき所見を認めない。手術所見では旁正中切開にて開腹すると暗紫色の腎盂により腎は被われ尿管は小指頭大の太さに拡張し第二生理的狭窄部で細くなっていた。腎下極では腎実質をもつて連絡せる馬蹄形腎を認めた。

馬蹄形腎は近年X線の発達に依つて左程稀な畸形でなく約500人に1人の割合で見られるといいますが、小児ことに乳児期に発見することは困難と思われ、先天性尿管閉塞によつて水腎症を合併した馬蹄形腎の一例を報告すると共に成人のそれと若干の比較考察を行った。

7) 尿管異所開口の2例

岐阜市民病院泌尿器科
尾 関 信 彦

9才と3才10ヵ月の女兒にみられた、尿管腔開口症の2例について報告した。いずれも腎、尿管剔除術を施行した。2症例は共に發育不全腎を伴ったThom 1型に分類される右膀胱外開口尿管であつたが、第2例

は重複腎盂の尿管が不完全重複尿管であつたもので、これは二分尿管或はY尿管と称されるものの異常開口で本邦では今迄に文献上5例の報告を見るにすぎない。第1例の剔出腎は大きさ1.5×1.5×1.5cm、重さ1.8g、第2例のそれは、上腎2.0×1.0×1.2cm、下腎3.5×3.0×1.5cm、重さ10.7gで著明な形態異常を呈する。両症の検査所見、手術所見、組織所見等について報告し、併せて治療法等について若干の考察を行った。

8) 毛巣疾患 (Pilonidal disease) について

第一外科
小 川 孝 一

毛巣疾患は本邦では稀な疾患とされているが、最近、その典型的な症例と思われる一例を見たので、その臨床的観察を併せて、本症についての若干の見解を述べた。

症例、17才の男子、肥満体の毛深い高校生。7ヵ月前、仙尾部にかゆみを伴つて少量の分泌物が出るのに気づいたが放置してあつた。2ヵ月前、仙尾部を強打した。同部は発赤腫脹し、1週間後、自然排膿し、分泌の排出が持続する様になった。局所には仙尾部正中線上に瘻孔が10cm隔てて2個見られ、瘻孔造影では皮下で交通していた。毛巣瘻の診断の下に en bloc に切除し、手術創は皮膚縁を創底に縫いつけ、二次的治癒を企て完全治癒した。瘻内腔には多数の剛毛が見られた。組織像では慢性炎症性肉芽組織で皮膚付属器は見られなかつた。

9) ヘルニア嵌頓と誤つた Pyocele testis の一例

岐阜医大第一外科
説 田 周 明

65才男子の左鼠径部及び左陰嚢部の有痛性腫脹を訴へ又非還納性であつた為嵌頓ヘルニアの診断のもとに手術を行った。外鼠径ヘルニアの大網嵌頓は見られたが陰嚢内腫瘍は睾丸水腫の二次的炎症による Pyocele testis であつた。剔出した Pyocele testis は鶏卵大表面平滑緊満弾性にて単胞性嚢胞を形成し膿汁を含有していた。組織学的検査にて Periorchitis purulenta および Atrophia testis senilis と診断した。睾丸水腫の二次的感染経路として当症例では副睾丸炎よりの炎症の波及が最も有力であつた。